

なにわ・大阪文化遺産学における地域連携

内田 吉哉



関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター特別任用研究員の内田吉哉と申します。よろしくお願いたします。本日は、なにわ・大阪文化遺産学における地域連携についてお話しさせていただこうと思います。

当センターのコンセプトの一つとして、研究成果を地域社会に還元するというを掲げています。これに特化した研究行事として、「地域連携企画」がございます。これを、我々のほうでは「出開帳でがいちょう」と呼んでおりまして、今年で4回目を迎えます。この地域連携企画を紹介することで、当センターの地域連携に対する取り組みの様子が見えてくるのではないかと思います。

センターが設立された2005年に開催しましたのが、地域連携企画第1弾「河内国府遺跡里帰り展」です。そもそも関西大学博物館の収蔵品の中に、藤井寺市にある国府遺跡から出土した遺物がありまして、それを現地に持って行って、展示会をやるのではないかとこのところからスタートしました。さらに、会場をお借りしました道明寺天満宮みなみぼうじょうみつおきの南坊城光興宮司が研究協力者になっていただいておりますので、そのご縁もございまして、第1回目は関西大学博物館が所蔵している国府遺跡の出土遺物を里帰りさせようという企画をいたしました。参加者に「国府遺跡がこのあたりにあったことをご存知ですか」と聞きますと、意外に多くの方が国府遺跡を知っておられました。しかし、実際にどのようなものが出土し、どういう研究が行なわれているかということまでは、ご存知ではありませんでした。このように、地元の方がたは

地域の文化遺産に関して、ある面ではよく知っているけれども、別の面ではよく知らないんだということがよくわかりました。

次に2006年の地域連携企画第2弾は、「八尾安中新田植田家の文化遺産」と題して開催しました。八尾市には、植田家という江戸時代中期に大和川付け替えに伴って開発された安中新田の管理・運営を行なっていた家があるんですが、当主の方が会所跡の家屋敷を丸ごと市に寄贈されまして、それを機に植田家を総合的に調査しようという試みが起こりました。八尾市立歴史民俗資料館の学芸員こたにとしあきの小谷利明さんが当センターの研究員でもありますので、植田家の総合調査に関わらせていただきました。調査を進めていきますと、これぞ文化財だというような美術品や古文書だけではなく、木綿で織った着物類や、ちょっとした什器など、大変おもしろいものがたくさんございました。そして、その成果を地元の方にぜひ知ってもらおうではないかということで企画しました。

当日は、八尾市文化財課の方から「市指定文化財旧植田家住宅整備について」というタイトルでお話しいただいたんですが、この住宅整備については現在発展しておりまして、2009年の5月に資料館としてオープンする予定です。

昨年の地域連携企画第3弾は、「もめん博物館 in 平野」と題して、大阪市平野区で開催しました。これまでは、関西大学の博物館が所蔵しているものを展示したり、これまでの研究成果を地域の人たちに知ってもらおうという方向性で企画を立てていたんですが、この第3弾で少し雰囲気が変わりました。といいますのも、平野という地域は、歴史をさかのぼっていきますと、古くは「平野郷」と呼ばれ、大阪とは別の独立した町であったわけでした。「平野かたぎ」ともいうべき気風が深く残っております。ですので、平野ではもうすでに、地元の方たちによって「平野の町づくりを考える会」が結成され、町おこしの活動が活発に行なわれておりまして、「町ぐるみ博物館」という催しを何年も前から開催されています。

例えば、京政食堂きょうまさきさんでは、「へっついさん博物館」ということで、店先のちょっとしたスペースを利用して「へっついへっつい」(かまどのこと)を展示しています。大阪府の橋下知事はしもとが、「大阪ミュージア

ム構想」を掲げておりますけれども、平野は、地元密着型で、町そのものをミュージアム化するんだという構想を早くから実現に移していた地域であります。しかし、平野の方は大学の研究者が乗り込んできて調査・研究をするといった、形式張ったことを嫌うということなので、第3回目のときは、我々も町ぐるみ博物館に1つブースを出すという形で参加させていただきました。

また、この出張博物館の中に、さりげなく今までの研究成果を盛り込んでおこうと考えました。それが「もめん博物館」です。八尾市という地域は、河内木綿の産地でございます、八尾市立歴史民俗資料館では熱心に木綿の復元栽培に取り組んでおられます。昨年、地域連携企画を準備していくなかで、木綿についての調査経過が蓄積してきたものですから、これを平野の町に持ち込もうと考えたわけです。テントを立てて糸車や綿くりの道具などを置きまして、地域の子供たちに実際に綿くり体験をしていただきました。

来週（10月26日）には、昨年に引き続き平野の地で「平野をさぐる」と題して、地域連携企画第4弾を開催する予定ですが、今月の5日には「大阪を探検しよう！」という関連企画を行ないました。昨年度の地域連携企画は、「平野の町づくりを考える会」の方がたと連携した企画だったんですけれども、今回は外から平野を見てみたらどうなるのかということで、関西大学に来たばかりの留学生一人一人にカメラを持たせ、平野の町を案内し、これはおもしろいと思ったものを写真におさめてもらいました。そして、来週開催する地域連携企画では、写真コンテストを行なう予定です。

さて、これまでの地域連携企画を振り返って、文化遺産学における地域との連携について考えてみますと、1つには文化遺産は将来に向けた地域の文化資源だということが言えると思います。地域連携企画第3弾および第4弾で取りあげました平野は、旧平野郷の流れを汲んでおり、地元意識の強いところですので、すでに町ぐるみ博物館のような試みをしておられますが、これはむしろ特殊な例でして、やはり大阪全般ということになりますと、「我々の町にはこれがあるんだ」という意識があまり見られません。大阪といえばたこ焼

きだとかお笑いだというステレオタイプな認識しかありません。ですから、地元特有の古い文化遺産が残っている寺社から、忘れられそうな文化遺産を大学が発掘し、地域社会へ働きかけているわけです。

2つ目には、地域との連携によって研究の切り口が広がってきたということが挙げられます。地域の中に入っていくことで刺激を受け、発展した調査・研究活動というものが生まれてきました。例えば、第1回地域連携企画で会場をお借りしました道明寺天満宮の宝物図録をつくらせていただきました。なお、当センターの成果物として出版したこの図録は、道明寺天満宮でも出版・販売しておられます。

3つ目には、文化遺産学の入り口として地域連携企画が大変有効だと思われまます。今回のフォーラムに際しまして、東北文化研究センターのことを勉強させていただきました。出版物として『東北学』や『季刊東北学』というのがありまして、それらを販売しておられるそうです（柏書房刊）。当センターでは時々、「おたくでこういう本を出したそうですけれども、お譲りしてもらえませんか」というお問合せがあるのですが、「すみませんが、一般にはお売りしてないんです」とお断りするという状況が続いております。本屋に行けば買えるという入り口の広さが、私としては大変うらやましく思います。大学の研究センターというのは、学術研究書を出すということは割と得意なんですけれども、地域連携企画という入り口から考えますと、直接に地域に乗り込んでいくことは、文化遺産学という学問の入り口を広げる、あるいは気軽に文化遺産のことを考えてもらうためには大変有効な試みなのではないかと思っております。最初は硬いタイトルの研究行事が多かったのですが、最近ではそれがやわらかくなってきて、少しずつ知名度が上がってきたかなという実感もございます。

最後になりますが、東北学となにわ・大阪文化遺産学を見比べてみますと、スタート地点が共通していて、考え方も似たような部分があるんですけれども、お互いがこのように集まって話をしてみますと、違いというものが明らかになってきました。おそらくこれが地域性というものなんだろう

うと思います。今は駅を降りますと、どこも似たような景色でありますけれども、こうやって地域というテーマで突き詰めていくと、東北学となにわ・大阪文化遺産学というふうな差が出てきますので、これが本来の形なんだろうと思います。こうしてみますと、東北学にしましてもなにわ・大阪文化遺産学にしましても「地域連携」というキーワードが、重要な位置を占めているのではないだろうかと思います。

内田 吉哉（うちだ よしや）

センター特別任用研究員。専門は、写真や絵画作品などの画像資料に基づいた大阪文化遺産の研究。主な論文に、「聖徳太子伝と在地伝承の相関―八尾・大聖勝軍寺の神妙椋木説話をめぐって―」（『近畿民俗』175・176、2008年）、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観と人物」（『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2008』、2009年）などがある。